キリスト教とグロテスク

田中　浩司

はじめまして。4月から協力研究員として皆様の仲間に加えて頂くことになりました。

現在私は主に内村鑑三を中心に研究をしておりますが、もともとはシャーウッド・アンダソンやカトリック女性作家のフラナリー・オコナーなど、グロテスクを作品のテーマに持つアメリカの作家の研究をしていました。

グロテスクとキリスト教とはご存知のない方には全く何の関係のないように見えるかもしれませんが、これが実に深い関係があります。アンダソンは『ワインズバーグ・オハイオ』という作品の中で

> 人間が真理の一つを自分のものにし、それを自分の真理と呼び、その真理に従って自分の生涯を生きようとしはじめたとたんに、その人間はグロテスクな姿になり、彼の抱いた真理は虚偽に変わる･･･。

と書いています。アンダソンがこの一文を書いたときの真理には間違いなくキリスト教のことが念頭にあったに違いないことは、作品の全編を通じて明らかです。キリスト教が一人の人間によって抱かれることによって虚偽に変わるほどちっぽけな真理ではないと信じていますし、アンダソンの言葉を丸飲みするわけではありませんが、キリスト教との出会いによってグロテスクになってしまった人は結構たくさんいるのではないでしょうか。

内村鑑三を通じてキリスト教信仰を得、内村の後継と目されるほどだった有島武郎でさえ、キリスト教を通じて霊と肉とが分離してグロテスクになってしまった自分を、『惜しみなく愛は奪う』の中で嘆いています。

グロテスクとは決して一言で語れるほど単純な概念ではないのですが、敢えて簡単に言いますと、

肉と霊のはざまで苦悩する人間の状態です。有島武郎の言葉を借りるならば「苦しい二元が建立」された状態、キリスト者であるならば、信仰を抱く自分自身から偽善的な虚偽の臭いが漂ってくるような気分、ある種の絶望的状態です。「私は、本当にみじめな人間です。誰がこの死の体から、私を救い出してくれるのでしょうか」というパウロの嘆き（ローマ 8: 24）がそれに近いものです。キリスト教は殊更に人を霊と肉に敏感にさせるので、キリスト教を信じることによって、この状態に陥る人は決して少なくないはずです。

しかし、キルケゴールは『死に至る病』のなかで、すべての人間は絶望状態にあり、自分が絶望状態であることに気がつかないでいる人が一番の絶望であると言っています。ですからその意味において、すべての人間はグロテスクであるとも言えます。しかしそれと同時にキルケゴールは、人間は自分の絶望状態に気がついたとしても、それに絶望してはならないという趣旨のことを言っています。のみならず、絶望しうるということは、人間の長所であり、永遠の意識が深ければ深いほど、絶望もまた、その苦悩の度を強めるであろう、そしてそれこそは、その人がそれだけ深い自己を生きようとしている印であるとも。

このキルケゴールの言葉にかろうじて励まされ、絶望の中より「信仰なき我を助け給え」と神に叫ぶよりすべなき私が、日本のキリスト教教育の中核をになう明治学院、しかもよりによって恐れ多くもキリスト教研究所のお仲間に加えて頂くのは、いささか心に咎めを覚えることなきにしもあらずですが、この度は元所員の成瀬武史名誉教授のご紹介を通じて、キリスト教主義教育研究プロジェクトに加えて頂くことになりました。

どうぞ今後とも宜しくお願い致します。

「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」（ローマ 8: 25）

（たなか　こうじ　協力研究員）